

三浦市立南下浦小学校

研究テーマ：自ら学ぶ子 ～もっと知りたい・やりたい・学びたい～

1 実践の目的

本校は全校児童が100人に満たない小規模校である。自然豊かな環境で育った児童はみな明るく素直だが、受け身な姿勢が見られるといった課題も有する。児童に加えて教員の数も少ないが、一丸となって校内研究を進めてきた。

本校では、令和3年度より『自ら学ぶ子～もっと知りたい・やりたい・学びたい～』を研究テーマに設定している。「自ら学びに向かっていく」児童の主体的な姿を育みたいと考えたためだ。それに伴い、昨年度導入したのが「学びのプラン」であった。

今年度は、その実践を継続するとともに、検討会・協議会の持ち方など、進め方に関しても大きく変化のあった年だった。

2 実践の内容

今年度、本校が力を入れて取り組んだのは以下の3点である。

- ① 検討会・協議会の持ち方を変更する
といった、進め方の工夫
- ② 「学びのプラン」実践の継続
- ③ 研修の充実

①進め方の工夫

今年度は、小規模校の強みを生かした実践を行うため、検討会・協議会の持ち方を大きく変更した。

これまでは、授業者による第一案に沿っ

て検討会を進め、授業の内容を深めていくことが多かった。今年度は、より授業を自分事としてとらえ、一人ひとりが学びを深めていくことをねらい、あえて学年部を設けなかった。一つの授業に対して全員がプランを作成し、検討会に臨むようにした。

②「学びのプラン」実践の継続

昨年度より導入した「学びのプラン」は、その授業のねらいや流れを児童の目線に立って記したものだ。その単元で「何を」「どのように」学び、最終的に「何ができるようになるのか」、児童と共通確認した上で授業を進めていくことができる。

昨年度に引き続き、横浜国立大学名誉教授の高木展郎先生に助言をいただきながら、教員間で形式、提示の仕方を確認、検討していった。校内研究だけでなく、日頃の授業にも「学びのプラン」を積極的に取り入れた。

③研修の充実

今年度は、先述した高木先生だけでなく、夏季研修会には山梨大学の茅野政徳先生をお招きし、国語の授業づくりについてご講演いただいた。国語力はすべての学習の基礎になる。その点をご教授いただけたことは、教員にとって大きな学びとなった。

また、教員間で学びを共有し合う「シェアリング研修」も実践した。校内研究の枠をこえ、人権研修、不登校支援に関する研修などの場もあり、教員が多角的に学びを深めることのできる一年となった。

3 実践の成果と課題

①進め方の工夫を通して

一人一つプランを作成するという進め方は、大規模校であれば実施が難しいだろう。小規模校の強みを生かした新たな進め方に挑戦できたという点では、一つ大きな成果だったといえる。

従来協議会では、その授業における教師のふるまい(発問の仕方など)が議論の中心となることも多々あった。そうした在り方から脱却すべく、協議会も「子ども中心」をより意識した。児童がプランをどう生かしていたか、どんな姿が見られたかという具体的な部分を話し合うようにしたのだ。

これにより、「学びのプラン」の良さをより生かしながら、授業者も参加者も実りの多い協議会を行うことができた。

②「学びのプラン」実践の継続を通して

教員にアンケートを実施した際、プランを導入したことで「自ら学ぼうとする児童の姿が見られた」という声が多く挙がり、その効果について再実感する結果となった。

さらに「継続することでプランの見方を児童が理解し、より学びに生かせるようになった」という声もあったため、今後も取組を継続していきたい。

今年度も、教員は様々な教科・単元でプランを作成することができた。かなりの量が蓄積されてきた状況のため、それらを使いやすく整理するなど、次年度の担任が活用しやすくなる環境を整えたい。

③研修の充実を通して

今年度は「学びのプラン」の基礎的な部分、実践継続の過程を高木先生に見ていただき、本校児童の課題としても大きい「国語力育成」の面を茅野先生にサポートしていただ

いた。この方向性がとても良かった。

その他の研修においても、大きく成果が見られた。学校評価アンケート(職員版)では、教員の人権感覚が養われたととれる結果が見られたし、「シェアリング研修」を通した学びを実践しそれを報告し合うなど、教員間の新たなつながりも生まれていた。

4 今後の展開

(1) 今年度の課題

「学びのプラン」の実践を継続していくことは教員の総意だったが、実際の検討会や協議会の在り方については、再度見直すことになった。来年度、本校は剣崎小学校との統合を控えている。教員が大きく入れ替わることを見据え、激動の中でも安心して校内研究が進められるよう準備したい。

新しい南下浦小学校としての一步を踏み出すため、研究テーマや目指す児童像も見直しが必要となる。

(2) 今後の展開

統合により児童数も増え、各学年の実態も大きく変わっていく。まずはそうした児童の状況を十分に把握した上で、研究テーマや目指す児童像を見直していきたい。

今年度は、教員がプラン作成に慣れてきたこともあり、校内研究としては「個」で動くことが多い印象の一年間だった。それによる成果もあれば、課題もあった。様々な立場の教員が安心して校内研究に取り組めるよう、学年部を復活させるなど「チーム」で動くことをより意識した次年度にしたい。

反省の中で「次年度はより協働的な学びを意識していきたい」という声が複数挙がった。児童だけではなく、教員も意識的に協働することができれば、よりよい校内研究につながっていくと考えている。